

実践事例⑪ 多摩市立連光寺小学校

1 取組・活動名

「3年 東京都立多摩桜の丘学園の友達と仲良くなろう」

2 取組・活動のねらい

- 地域の特別支援学校児童との交流をとおして、共生社会を達成するための第一歩としての障害者理解を促進する。
- パラリンピック競技種目「ボッチャ」を体験し、パラリンピックや障害者スポーツへの関心を高める。

3 教育課程上の位置付け

「総合的な学習の時間・23時間」

4 実施上の工夫

- ・ 第1回の交流前に、交流校の特別支援教育コーディネーターによる、障害理解推進授業（出前授業）を実施し、交流校の学校や児童の様子を理解した上で、児童の交流を開始した。
- ・ 第1回目の交流を実施し、交流校の児童の実態を把握した上で、児童が第2回以降の交流内容を考えていけるように計画した。
- ・ 交流校児童とともにを行う活動に、パラリンピック種目「ボッチャ」を取り入れた。事前に東京都障害者スポーツ協会指導員を本校に招き、児童と教員が「ボッチャ」のルールやゲーム運営に関する指導を受けた。この工夫により、交流当日はスムーズに活動を展開することができた。

5 本取組・活動の内容



「障害理解推進授業（出前授業）」

- ・ 交流校の多摩桜の丘学園特別支援教育コーディネーターを学校にお迎えし、学校紹介や児童の様子について、画像を提示しながらご紹介いただいた。
- ・ 近隣の学校ではあるが、ほとんどの児童は校内に入ったことはなく、実際の交流の前に貴重な事前学習の場となった。



「児童が自ら考える交流会」

- ・ 交流校で実施した第1回の活動で学んだことをもとに、児童は本校で実施する第2回の交流内容を自ら計画し、準備を進めた。
- ・ 交流会の当日は、相手校の友達に寄り添ったり手をつないだりする姿が見られ、相手の立場に立って交流を進めることができた。



「パラリンピック競技種目のボッチャ交流」

- ・ ボッチャは、障害者と健常者が同じチームとして取り組むことが可能なスポーツの一つである。
- ・ 交流校とのボッチャ交流を前に、東京都障害者スポーツ協会の指導員を招き、ボッチャのルールや運営方法を学んだ。
- ・ ボッチャを交流校と行うことで、応援しながら楽しく取り組むことができ、パラリンピックへの関心も高まった。

6 成果

- ・ 特別支援学校の児童とのふれあいをとおして、相手を理解し寄り添う気持ちを育むきっかけをつくることができた。
- ・ 特別支援学校教員による出前授業をはじめ、パラリンピック競技種目のボッチャによる交流や児童が自ら考えた遊び交流など、3年生を中心とした特別支援学校との交流のモデルを作成することができた。
- ・ ボッチャを交流校と体験することで、パラリンピック種目への関心が高まり、障害者および障害者スポーツへの理解が深まった。